

ラテンアメリカ都市物語

＝第25回＝

グアダラハラ市 —原始的欲求から大都市への変貌

岡部 拓

グアダラハラ市は、メキシコ西部に位置する国内 GDP 第4位のハリスコ州の州都である。面積はおよそ 188km² で (Gobierno del Estado de Jalisco 2021)、隣接する8つの市と併せて、グアダラハラ首都圏 (面積約 2700km²) を構成する (Gobierno del Estado de Jalisco 2022a)。2020 年時点でのハリスコ州の人口約 830 万人の 56% (464 万人) は、このグアダラハラ首都圏に集中する (IIEG 2020a)。

グアダラハラという名称の市はスペインにもある。メキシコのそれは、スペインの征服者・入植者であるヌーニョ・ベルトラーン・デ・グスマンが自身の故郷であるスペインのグアダラハラ市からとってつけたものである。

ハリスコ州グアダラハラ市はまた「Perla tapatía」とも呼ばれる。直訳すれば「タパティーアの真珠」である。通例、タパティーオ／タパティーアは「グアダラハラ市民」を指し、その語源は、ハリスコ州の先住民族であるナウワ族 (Náhuatl) の言葉にある「Tlapatiotl」(トゥラパティオットウル) だと言われる。征服者のスペイン人がうまく発音できず、「タパティーオ(ア)」になったようである¹。「Tlapatiotl」は「三つ分の価値がある (que vale por tres)」という意味であるところから、グアダラハラ市は「貴重な価値のある真珠のように完璧な街」ということになる。

事実、産業発展、経済ならびに観光地としてメキシコ国内でも重要な都市の一つに挙げられ、さらに文化的な側面でも、数々の古典的建造物がある。家屋についても、市内を散策すれば、100 年以上も前に建設されたものも目にする。

市中心地 (ダウンタウン) でひと際目を引くのが、「グアダラハラ教会」である。同教会は 1561 年から 1618 年の間に建築された新古典主義の教会である。グアダラハラ市民の 9 割以上はカトリック教徒で (Gobierno del Estado de Jalisco 2021)、同教会の周りにはその他にいくつもの教会が見られる。



グアダラハラ教会 (写真はすべて筆者撮影)

同教会から徒歩 5 分ほどのところには「カバーニャス文化院」があり、これもグアダラハラ市を象徴する新古典派建造物である。同院は、ファン・クルース＝ルイス・デ・カバーニャス・イ・クレスポ司教のもと創設され、1810 年から 1980 年まで孤児院として機能していた (独立戦争時には軍事本部となった)。現在は、音楽や舞踏、観劇などのために活用されている (Gobierno del Estado de Jalisco 2022b)。

また、グアダラハラ市を縦横断する道路 (東西のバジャルタ通り／南北のロペス・マテオス通り) が



カパーニャス文化院

交差する地点のロータリーには「ミネルバ像」がある。ギリシャ神話の女神をモチーフにした銅像の下には、表面に「正義、知恵ならびに強さがこの忠実な街を守る (Justicia, Sabiduría y Fortaleza custodian a esta leal ciudad)」、そして裏面に「グアダラハラの栄光に (A la gloria de Guadalajara)」と刻印されている。1956年に建造されたミネルバ像の土台には、グアダラハラ市に貢献した18名の著名人の名前も刻まれている。スポーツ、社会・文化あるいは政治的なイベントなどさまざまな集会の拠点にもなり、ジェンダーに基づく暴力の根絶や、新型コロナウイルス流行時には銅像にマスクがつけられるなど、各種キャンペーンの象徴としても活用されている。



ミネルバ像

グアダラハラ市の歴史

かかる特徴のグアダラハラ市の歴史は長く、紆余曲折があった。1522年にスペインの征服者らが現在のハリスコ州の領土の制圧を決め、1530年に先述の

ヌーニョが軍隊を率いて南方から北上する形で攻めた。

1532年に最初のグアダラハラ市が置かれたのは、現在のサカテカス州のノチストラン市であった。しかし1年足らずで、潤沢な水とよりよい生活環境を求め、市を移動する。2度目は現在のトナラ市がある場所に設置された。2年後には再度移動し、現在のグアダラハラ市北東にあるトラコタン市を拠点としたが、先住民から度重なる攻撃を受けた。最終的に、1542年2月に現在のバージェ・デ・アテマハック地区に市を設置した。サン・フアン・デ・ディオス川に沿った場所で、当時の住民はおよそ300人だった。

かくして創設されたグアダラハラ市であり、その後も着実な発展を遂げ、1560年にヌエバ・ガリシア（現在のハリスコ州を含む地域の当時の名称）の首都となった（Gobierno de Guadalajara 2022）。

18世紀になると、産業、商業、鉱業が発達し、グアダラハラ市の生活水準はきわめて高くなり、建築家、哲学者、弁護士、科学者、詩人や作家など多種多様な職業人が移住した。1771年には、グアダラハラ市の歴史において一番有名なアントニオ・アルカルデ・イ・バリーガ司教が移住する。市民病院(Hospital Civil)やグアダラハラ大学の創設者である。

（筆者が勤務する）グアダラハラ大学は、現在はハリスコ州の公立大学であり、その初めての校舎であった建物は、今はオクタビオ・パス・イベロアメリカ図書館となっている。市民病院は現在も存続し、社会保険に加入できない・していない患者に対して（ほぼ）無料で医療行為を施している。なお同病院はグアダラハラ大学の付属病院という形で、調査研究や学生の研修にも役立っている。

18世紀後半、グアダラハラ市の人口は急増する。



オクタビオ・パス・イベロアメリカ図書館（左：外観／右：内部）

Sandoval (2018: 15-39) によれば、1753 年に 1 万 1000 人程度であったものが 1804 年には約 3 万 5000 人となる。こうして多くの「地区 (Barrios)」ができあがり、それぞれが教会や広場、そして市場を持つようになった。市が広がりを見せる中、人々の移動手段は徒歩、馬あるいは馬車であった。1905 年には 17 台の車があり、1920 年にはそれが 320 台となった。

第二次世界大戦中、グアダラハラ市は急速な産業発展を遂げる。1943 年に「グアダラハラ市町村連携委員会」が発足すると同時に、現代的な都市化が図られた。50 年代には、地域の市場であった「サン・フアン・デ・ディオス市場」を廃止し、現在も残るラテンアメリカ最大の「自由市場」が創設された。個人的にはグアダラハラ市で一番訪れている場所である。この時期にはまた道路敷設や広場ならびに公共施設の建設が積極的に行われ、こうして、公共の場を作り上げることで、市民の共存の機会を設け文化・伝統を培おうとしたのである。



自由市場。2022 年 3 月にレストランフロアで火災があり、早急な復旧が待たれる

1960 年代になると、自動車のためのインフラ整備が急伸する。都市の規模も拡大し、人々の住居地も中心地から離れていくこととなる。そこで「公共の場」として登場するのが商業施設であった。「太陽の広場」は 1969 年に創設されたラテンアメリカ初の商業モールで、現在も存続する。同時期には、先述の「ミネルバ像」を囲んでロータリーができ幹線道路が敷設された。自動車移動を簡便にするためである。こうしてグアダラハラ市は、80 年代初頭には現代的な社会として必要なものはすべて揃えていた。



太陽の広場

大都市そして持続可能な社会へ

とはいえ代償も大きい。16 世紀のグアダラハラ市の創設者は、まず水を求めて転々とした。元は水が潤沢な地域であるにもかかわらず、その非効率な利用によって水不足が絶えない。グアダラハラ首都圏でいえば、これまで 80km²におよぶ森林を失っている (Sandoval 2018: 58-59)。これはグアダラハラ市面積の 4 割強に相当する。さらに 1980 年に 27 万台程度だった自動車数は (Sandoval 2018: 48)、2020 年には 340 万台になった (うち自家用車は 230 万台強) (INEGI 2020)。

2020 年時点のグアダラハラ市の居住者は 138 万人で、住居は約 39 万戸ある。右の住居数は、2010 年と比較すると 5%、2000 年比では 7% 増となる (IIEG 2020b)。500 年前はたった 300 人であったのが、現在ではその 4600 倍の人口となった。

さまざまな商業・経済活動も増え、観光業に加え、街は様変わりし、交通手段や生活の質も変化してきた。

これを通じて、グアダラハラ市自体の人口吸収・住居建設には限界が見られるようになった。この点は、グアダラハラ市に隣接するサポパン市の人口・住居の増加をみると明らかである。つまり、同市の 2020 年時点での人口は 147 万人とグアダラハラ市よりも多く、また住居数も 42 万戸であった。右の数値は、2010 年と比較して約 13%、2000 年比では 88% の増加である (IIEG 2020b)。一方でグアダラハラ市内に吸収しえない人々が郊外へとその居住地を求めて広がり、他方でグアダラハラ市内では、マンション型の住居が急増している。

こうなると、人や車の移動の量・時間ともに増加

し、非効率になる。大半の市民の移動手段は公共バスや電車であり、これまでの東西南北を走る電車2路線（Línea 1とLínea 2）に加え、北西から南東へかけた人の移動手段として2014年から建設が始まったLínea 3が、2020年9月に開通した。グアダハラ首都圏を囲む環状道路にも、2019年から公共バス（Macro bus）用レーンの建設が始まり、2022年1月からは運行を開始している。また、2014年からは公共レンタル自転車として「MiBici」が開始され、グアダハラ市と隣接する2つの市において、300の駐輪場、3200台のレンタル自転車が装備されている。これと相まって、主要道路には自動車専用レーンが設けられたが、自動車利用者また近隣住民からの批判も少なくない。



Línea 3（プラサ・パトリア駅）



MiBici 駐輪場

これらの公共事業の意図は明白である。公共移動手段を活用し自動車の交通量を減少させ、これをもって排気ガス等の温暖化ガス排出を減らし、より持続

可能な社会を創り上げようとする。さらに、移動時間を短縮・有効活用させ、必要であれば少し歩かせるようにして、市民の共存の機会を多くしようと試みるものである。

とはいえ、地方自治体あるいは州レベルでの都市開発計画は、人口、住居地の拡大にうまく対応できず、インフラ整備・道路敷設が遅れている。上記、電車のルート拡大があるとしても、現状では、一般市民の移動手段は公共バスである。グアダハラ市内のみならず、出通勤のピーク時には、市内へ向かうバスは満杯であり、郊外の住居へ向かう夕方のそれと同様である。自動車数の急増とも相まって、交通渋滞は相当である²。

十数年前までは筆者も同じくバス移動であった。外国人であることを差し引いても、彼らの心情・環境の半分程度は理解しているつもりである。メキシコ全体にも言えるが、満員バスに揺られながら、仕事や勉強のため、居住地として飽和状態となったグアダハラ市へ向かうメキシコ人には感服する。

「水」という原始的欲求から生まれたグアダハラ市は、500年を経て変貌した。飽和した都市と生活環境の変化、また現在は地球温暖化や環境保護というテーマがある。不変であると言えるのは、そこに住む人々の逞しさであろう。貧困をものともしない適応力（resiliencia）は、今もグアダハラ市を「Perla tapatía」として支えているのである。

参考文献

- Gobierno de Guadalajara (2022) *Historia de Guadalajara*: <https://guadalajara.gob.mx/gdlWeb/#/historia>
- Gobierno del Estado de Jalisco (2021) *Guadalajara*: <https://www.jalisco.gob.mx/es/jalisco/municipios/guadalajara>
- (2022a) *Área metropolitana de Guadalajara*: <https://www.jalisco.gob.mx/es/jalisco/guadalajara#:~:text=El%20C3%81rea%20Metropolitana%20de%20Guadalajara,conjunto%20comparten%20una%20constante%20conurbaci%C3%B3n>
- (2022b) *Instituto Cultural Cabañas*: <https://jalisco.gob.mx/es/jalisco/destinos/instituto-cultural-cabanias>
- IIEG (Instituto de Información Estadística y Geografía de Jalisco) (2020a) *Localidades y población total por municipio según tamaño de localidad, Jalisco 2020*: <https://iieg.gob.mx/ns/wp-content/uploads/2021/02/TabCensoCaracDemoJal2020.xlsx>
- (2020b) *Población en hogares censales por municipio, sexo y grupos de edad según parentesco, Jalisco 2020*: <https://iieg.gob.mx/ns/wp-content/uploads/2021/02/TabCensoHogyVivJal2020.xlsx>
- INEGI (Instituto Nacional de Estadística y Geografía) (2020) *Vehículos de motor registrados en circulación del año 2020*: <https://www.inegi.org.mx/contenidos/temas/economia/vehiculos/>

tabulados/vmrc.xlsx

Sandoval, J.A. (2018) *¿En dónde nos perdimos? Manual de transformación urbana. Caso de estudio: área metropolitana de Guadalajara*. México: Coloristas y asociados

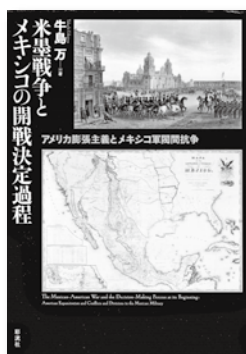
その他の資料

“Conoce la razón por la que le dicen “Perla tapatía” a Guadalajara, Jalisco”, *El Heraldo de México* (10 de febrero de 2021): <https://heraldodemexico.com.mx/nacional/2021/2/10/conoce-la-razon-por-la-que-le-dicen-perla-tapatia-guadalajara-jalisco-255844.html>
 日墨研究プログラム (PROMEX) (2021 年) ハリスコ州在留邦人の生活意識 (コロナウイルス・パンデミックにおいて) <http://promex.cucea.udg.mx/programa-mexico-japon/proyectos-investigacion/analisis-del-promex>

- 1 “Conoce la razón por la que le dicen “Perla tapatía” a Guadalajara, Jalisco”, *El Heraldo de México* (10 de febrero de 2021): <https://heraldodemexico.com.mx/nacional/2021/2/10/conoce-la-razon-por-la-que-le-dicen-perla-tapatia-guadalajara-jalisco-255844.html>
- 2 筆者の勤務するグアダラハラ大学経済経営学部は、2008 年に「日墨研究プログラム (Programa de Estudios México-Japón: PROMEX)」を立ち上げ、日墨の関係につき学際的に研究する。グアダラハラ首都圏在住の日本人の生活意識調査も実施し、総じて道路の劣悪な敷設状況や交通渋滞について不満があることがわかった。パンデミック下で行った生活意識調査については、日墨研究プログラム (2021 年)。

(おかべ たく グアダラハラ大学経済経営学部・正教授)

ラテンアメリカ参考図書案内



『米墨戦争とメキシコの開戦決定過程

ーアメリカ膨張主義とメキシコ軍閥間抗争』

牛島 万 彩流社

2022 年 3 月 365 頁 4,200 円+税 ISBN 978-4-7791-2818-9

1821 年にメキシコがスペインから独立して以来、米国は当時のメキシコの国土の約半分にあたる現在の米国南西部のカリフォルニアからニューメキシコ、テキサスにわたる地域を奪った。

本書は 19 世紀後半におけるメキシコの政情不安と権益をめぐる党派の抗争の実態から説き起こし、米国人入植者のメキシコ領テキサスへの侵入、独立要求、それを受けた米国政府がメキシコ政府へ分離独立を承認するよう求める交渉をし、アラモ砦での戦いを経てついにはメキシコ大統領サンタ・アナを屈服させてテキサスの独立を承認させ、テキサス共和国の米国政府への編入を実現した経緯を明らかにしている。

留まることを知らない米国の膨張主義によって米墨関係は緊迫化し、メキシコ北部の反政府派とテキサス人義勇兵が手を組もうとするなどの混乱があった。これを收拾すべき時にメキシコ中央では軍部によるクーデター、圧政政治、党派間の権力奪取と烏合離散が続いたが、1845 年には米墨間の開戦機運はもはやメキシコのバルデス中央政権も抑止不能になり、開戦に躊躇していたにもかかわらず国内の反政府派および主戦派への対抗策として翌 1846 年には戦争状態に突入した。短期決戦により勝利し英国の仲裁を引き出すという筋書きは緒戦の敗北で失敗し、侵入した米国軍がメキシコ市を陥落させたことで終戦に至り、1848 年の両国間条約で広大な領土を失ったことが、その後の両国の経済的運命を大きく左右することになった。

メキシコでは戦争責任を米国側に帰し侵略を非難する考えが一般的であるが、本書はどのような条件や環境下で開戦を決断するに至るかを史的検証したものである。開戦の背景には当時メキシコ内部での権力闘争があり挙国一致しなかったことを明らかにしている。しかし、本書の価値は、戦争以前から白人系米国人に有色人であるメキシコ人への偏見、蔑視があり、メキシコ支配を正当化しようとしていた一方で、メキシコ人側にも米国人嫌いが広まった心理的要因、つまり経済的利潤追求に固執する無機質な米国人との思いがあったこと、これらが現在もなお両国関係に影響を与えていることを指摘していることにある。

(桜井 敏浩)



『インディオの聖像』

立花隆文 佐々木芳郎写真 文藝春秋

2022年5月 168頁 2,700円＋税 ISBN978-4-16-391547-0

17世紀に南米南部、現在のアルゼンチン、パラグアイ、ブラジルで、グアラニ族社会の中にイエズス会士が「神の王国」とも言うべき伝道村を建設し、カトリックに改宗したインディオたちに教義とともに音楽、美術、建築などを教えた。イエズス会士の活動は結局スペインとポルトガル本国政府の政治的な抗争の結果南米から追放され、踏み留まった宣教師たちと信者のインディオたちはスペイン人に殺戮された。この「ミッション」と呼ばれた伝道村跡は今もこの地域に散在し世界文化遺産に指定されたものもあるが、遺された彫刻絵画は中南米独自のバロック芸術と評価できるものだった。

この顛末を主題とした映画（米ワーナーブラザーズ、1986年）『ミッション』に触発された当時46歳の立花が、1986年から87年にかけて写真家佐々木芳郎と共に初の南米取材を行った際の30年も前に書かれた原稿（一部は『文藝春秋』1987年5月号等に既掲載）と残されていた未完の直筆原稿、当時数回の南米取材で佐々木が撮った写真を基に集大成したのが本書である。1974年に『文藝春秋』に発表した「田中角栄研究」で一躍注目され、旺盛な文筆活動を続け「知の巨人」と呼ばれて2021年に亡くなった立花の、キリスト教と異文化の衝突、中南米バロック芸術様式などから感じたキリスト教観が、あらかじめ調べていた伝道村の歴史、取材紀行記の中で述べられ、佐々木の素晴らしい写真の数々がその思いを感じさせてくれる。

（桜井 敏浩）



『聖ヤコブ崇敬とサンティアゴ巡礼』

—中世スペインから植民地期メキシコへの歴史的つながりを求めて—

田辺加恵・大原志麻・井上幸孝 春風社

2022年3月 360頁 4,000円＋税 ISBN978-4-86110-785-6

イエス・キリストの12使徒の中で最も早く殉教した聖ヤコブの遺骸がどこに埋葬されたかは聖書に記述はないが、9世紀にスペイン北部のガリシアで聖ヤコブの墓なるものが発見され、サンティアゴ・デ・コンポステラの大聖堂が建てられ、ローマ、エルサレムとともにキリスト教の三大聖地の一つとして巡礼地となり、今でも多くの巡礼者がイベリア半島、フランス等欧州、世界中から目指して訪れる。特にスペインを中心に欧州で崇拝されている聖ヤコブ（スペイン語ではサンティアゴ）の名を冠した町はイベロアメリカ各所にある。

本書は、イベリア半島における聖ヤコブ崇拝の始まりと新大陸での展開の歴史的経緯、これまで中世スペインと植民地時代メキシコが同じ枠組みの中で議論されたことがなかった時代や地域を越えた歴史的つながりを、聖ヤコブを軸に一つの流れの中で考察しようとしたものである。最後の第4章でクロニカ（年代記）における聖ヤコブの記述を中心にスペイン征服以降のメキシコ先住民が聖ヤコブ崇拝をどのように教えられ受容したかの実態を、メキシコ史・メソアメリカ史が専門の井上専修大学国際コミュニケーション学部教授が考察している。

（桜井 敏浩）



『黒人と白人の世界史』

―「人種」はいかにつくられてきたか（世界人権問題叢書 104）―

オレリア・ミシェル 児玉しおり訳 明石書店

2021年10月 376頁 2,700円＋税 ISBN978-4-7503-5230-5

UNESCO が 1950 年に人種を不平等の根拠にする人種主義を科学的に否定する結論を出しているが、政治・社会的現実として人種は存在する。「欧州人は人種主義者だからアフリカ人を奴隷にした」というのは逆で、特に黒人（ニグロ nègre）を奴隷にしたことから人種主義者になったことを、奴隷制度、サハラ以南のアフリカにおける奴隷制、アメリカの発見までの奴隷制の再構築後、次の暗黒時代となった 17 世紀のブラジル・カリブ地域における砂糖プランテーションでの黒人奴隷制、南北アメリカでの奴隷貿易の歴史を辿り、それらへの異議の高まりの一方で一時期米国の奴隷制維持とフランスの奴隷制復活があったが、19 世紀奴隷貿易廃止運動や中南米諸国の独立によって大西洋経済への打撃による植民地の転換が奴隷制を終わらせた。しかし、代わって雇用形態をとる奴隷制が世界各地で広がり、人種の科学は植民地統治のための科学となってきたのである。

20 世紀に入って工業賃金労働者と都市経済の優位化によって、植民地計画とプランテーション経済は二次的なものになったが、人種の分断はむしろ活性化され、社会科学、医学、政治、政策における人種についての学説の驚異的進展、そして最後にある国々では人種問題が社会問題を提起する方法になり得たかを分析し、「白人の秩序」が獐猛な側面を見せるなか、依然最後の砦を維持していることを指摘している。（桜井 敏浩）



『乾いた人びと』

グラシリアノ・ハーモス 高橋都彦訳 水声社

2022年1月 176頁 2,000円＋税 ISBN978-4-8010-0623-2

ブラジル北東部アラゴアス州出身の文学者ハーモス（1892～1953年）によるブラジルの心理小説と言われる文学の古典的名作（原作 1938 年）。13 章のそれぞれは独立したエピソード、光景だが一貫したストーリーで構成されている。

牧童ファビアーノは旱魃により荒廃した熱帯乾燥林荒野カーチンガの牧場から、雇い主に無断で妻と二人の幼い子供、牝犬と共に飛び出し、一家で生存できる場所を求めて彷徨い歩く。一度は見捨てられた牧場に住みつき農園主と契約を交わして生活が楽になりかかったが、再び旱魃に見舞われ流浪の旅に出る。一時凌ぎで牧場にいても町に移っていた時も、農園主や商人に勘定をごまかされカーキ色の制服を着た警官に不当な暴力を受けるなどの苦難は続く。旱魃現象に起因するとはいえ、自然との戦いを無力にしている農牧開発の低い技術水準、退歩し非生産的なブラジル北東部の社会構造によって、農牧民に並み以下の生活すら許されないカーチンガで生きなければならない一家の「苦悩」の姿を描いている。（桜井 敏浩）